

令和 4 年 6 月 13 日現在

機関番号：32670

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19K00648

研究課題名(和文) 副詞における程度の意味・評価の意味の発生の研究 漢語副詞を中心に

研究課題名(英文) Study on the Development of Degree and Evaluative Meaning in Adverbs : Focusing on Sino-Japanese Adverbs

研究代表者

鳴海 伸一 (NARUMI, Shinichi)

日本女子大学・文学部・准教授

研究者番号：90611799

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)： 個別の語の語史研究をおこない、それを総合することで意味変化の類型を考察し、語史研究の方法論の検討へと発展させることを構想した。

「遅々」は、近代以降にトシテ型の副詞用法を獲得するとともに、「遅々として進まない」という固定的な表現を形成したことを明らかにした。直近2年間の日本語学・日本語史、特に語彙の歴史的研究に関する研究状況の総括をおこなった。「国定修身教科書」を語彙史資料として検討し、問題となる事例を挙げて論じた。「賞罰」の語史的検討によって、「方丈記」の本文解釈を論じた。さらに、二字漢語のうち、二字が対になるもしくは反対の意味を表すくみあわせのものについて、意味変化の類型を考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究であつかう内容の一部は、言語普遍的におこり得る現象である。また、本研究であつかう漢語受容史上の事例は、中国語を受容するに際しての、自言語の干渉による変容といえる現象であることから、アジアの他言語における中国語受容や、ラテン語とヨーロッパ諸語の関係の研究などに、考察の視点を提供することができる。

さらに、本研究が提供する、個別の語史研究のあり方とそれらの理論的総合のしかたを問題にする視点によって、方法論に関する議論が活発になることが期待される。

研究成果の概要(英文)： I conducted a study of the history of individual words, considered the types of semantic change by integrating them, and planned to develop it into a study of the methodology of studying the history of words.

I clarified the process by which "Chichi to shite" formed the fixed expression. I summarized the research status of historical research on vocabulary over the last two years. I examined the national textbook "Syuushin" as a vocabulary history material. I discussed how to interpret the text of "Houjouki" by examining the meaning of "Shoubatsu". Furthermore, I considered the types of semantic change of two-character Sino-Japanese words.

研究分野：日本語学

キーワード：副詞 漢語 方法論

1. 研究開始当初の背景

日本語における漢語の研究は、源流や国語への受容、形態・音韻上の特色などが概括的に整理され、個別の語の変遷や、個別の資料における実態が記述される段階を経て、漢語全体の理論化・体系化を視野にいたした研究もなされるようになってきている。

一方で、副詞の歴史的・通時的な研究が近年さかんであることは、学会誌『日本語の研究』の展望号などでも指摘されている。とりわけ、個別の語の歴史だけでなく、体系の変遷を問題とするものや、変化の類型化をめざす研究がある点が特筆すべきことといえる。副詞のなかでも、研究者による関心が集中するものに程度的意味・評価の意味がある。評価の意味とはどのようなものか。それは程度的意味とどのような(交渉)関係をもち得るのか。

そうしたことを念頭に本研究では、漢語副詞を中心に、和語の事例もあわせ、個別の語史をまとめることと、それらを総合して意味変化を類型化することによって、考えてみたい。副詞研究がさかんであることは、衆目の一致するところであるが、本研究の特色として、(甲)漢語受容史とのかかわりからの考察、(乙)方法論的議論への貢献、といったことがあげられる。

2. 研究の目的

副詞用法が発生した漢語を対象とし、個別の事例についての語史研究をすすめる。それをうけて、()個々の変化の具体的過程を考察するとともに、どのような変容の事例があり得るか、その外延をさぐり、()個別の語史を総合することによって、副詞の意味変化(における程度的意味・評価の意味の発生)といった観点から理論的な体系化・類型化を試みるための資料とする。それは、()日本語における副詞の変化・発達の歴史の中における、漢語受容のはたした役割を考察するための足掛りとなるものであり、さらに、ここまでの自身の研究を踏まえ、()個別の語史研究のあり方を再検討することをめざす。なお、ここでいう漢語とは、漢字表記される語をひろくふくむものとする。

これまででも、主に日本語において独自に副詞用法が発生させた漢語を事例に、個別の語史研究を総合し抽象化することによって、語(特に副詞)の意味変化の方向性を類型化することをめざしてきた(鳴海伸一 2015『日本語における漢語の変容の研究 副詞化を中心として』等)。これは近年の理論的・体系的側面からの研究というながれ・背景に沿うものといえる。

3. 研究の方法

個別の語史をまとめ、それをもとに、副詞の意味変化の方向性の類型を考察する。用例の収集方法や、分類・整理の手順は、以下のとおりである。

(ア) 中国文献・本邦文献から、各語の用例を収集する。

(イ) 収集した用例を、分類・整理する。それをもとに、各語がどのようにして使用されはじめ、どのように意味変化してきたかを考察する。

(ウ) なかでも、程度的意味・評価の意味が発生したと考えられる副詞を、実例とともにできるだけ網羅的に挙げ、それぞれの意味の発生過程を類型化してまとめる。

漢語受容と副詞の歴史とのかかわりについては、本研究期間内に詳細に論じきることはむずかしいだろうが、a. もともと副詞としての意味をあらわす漢語として受容したものと、日本語においてそれらの意味を発生させたものとの、歴史的な前後関係、b. 漢語単独で副詞用法として使用されるか、「に」「と」などのついた形で使用されるか、といったことを念頭に、個別の語史研究の中で指摘すべき点を指摘していくこととなる。

4. 研究成果

(1) 個別の語史研究 「遅々(として)」

「遅々」という語がある。1~3 にみるように、現代では事態が停滞してものごとがはかどらない様子をあらわす。2や3のように連体修飾の例もあるが、1のように「遅々として」の形で連用修飾する例が多い。なかでもこの例のように「遅々として進まない」という表現での使用が非常に多く、「進まない」等の表現との結びつきがかなり固定している点に特徴がある。

1 世代交代は遅々として進んでいない。(朝日新聞、2019年2月7日朝刊)

2 科学の現場というのはこのような遅々とした歩みなのであり、(朝日新聞、2018年1月21日朝刊)

3 遅々たる歩みではあるが、それは進歩には違いない。(朝日新聞、2019年2月28日朝刊)

この「遅々」は、いつどのようにして日本語においてトシテ型の副詞用法を獲得し、いつどのようにして「遅々として進まない」という固定的な表現が形成されるにいたったのか。そうした問題意識をもとに、「遅々」を中心に、トシテ型漢語副詞が特定の形式との結びつきを強め、表現が固定化する過程を考察した。

その結果、「遅々」は近代以降にトシテ型の副詞用法を獲得するとともに、「遅々として進まない」という固定的な表現を形成したことを明らかにした。このようなものは、「統合句格」のうち「主述関係」の裏面化が進み、後行述語と「対等」の関係だったトシテ句が、後行述語に「従属」してそれに対する専門の修飾要素となったものと考えられる。類例としては、「杳として(知れない)」「恬として(恥じない)」等を挙げることができる。

「遅々(として)」は漢語由来の副詞であり、主にトシテを付して使用されるため、トシテ型の漢語副詞と呼べる。また、トシテ型はタリ活用形容動詞との関わりがあると考えられるが、「遅々」の場合も、少数ながら3のような「遅々たる」といった形が現代に残るように、歴史的にもタリ活用形容動詞としての用例がある。本研究は、「遅々(として)」を中心に、トシテ型の漢語副詞において表現が固定化されるということが、どのような現象であるのかを考え、それを漢語副詞や漢語形容動詞の歴史のなかに位置づけることを試みたものであるが、ト(シテ)型漢語副詞が、漢文訓読との関係が深い点についてはあまり触れられなかった。ト(シテ)型そのものの発生について、漢語・漢文訓読の歴史のなかで考察することについては、今後の課題となる。

(2) 日本語語彙の歴史的研究 レビューと実践

直近2年間の日本語学・日本語史、特に語彙の歴史的研究に関する研究状況の総括をおこなった。本研究の背景・目的・方法に関連することとしては、

- ・(近代を中心に)漢語をあつかう単著がめだって多いこと
- ・語彙(史)研究は、文法、文字・表記、文章・文体、音韻等他分野との接点・境界上に多くのものがあり、特に文法との接点にあるものは多いこと
- ・類義語や関連する語をあわせた部分的語彙体系をあつかうものを含む、いわゆる語史研究は極めて多いが、全体の傾向として、中世以前を対象に含むものは少なく、近世以降を対象の中心とするものが圧倒的に多いこと
- ・語史研究では、その語の長期にわたる歴史を描ききる(ことをめざす)タイプのは少なく、現象と範囲をしばって特定の文法論・文法史的観点をとりこんで分析するものが多いこと
- ・語史記述の方法についての論もあること

等を確認した。

なお、方法論の問題に関連して、物語論的歴史観にもとづいて、訓読文の誕生から衰退そして標準日本語文への書記言語の交替を、漢語の「威信」をキーワードに物語る福島直恭(2019)『訓読と漢語の歴史[ものがたり]』(花鳥社)の書評をおこなった。

また、「国定修身教科書」を語彙史資料として検討し、題名(徳目)・人物(名)・格言を中心に、問題となる事例を挙げて論じた。個別の語の実例を、他の資料にみられる言語現象との関連で指摘するとともに、特に題名における改訂(修身教科書は、他の国定教科書と同様に、数次にわたって改訂がなされた)の傾向として、二字漢語の増加を指摘した。たとえば、

- ・「召使」(第二期、巻四-第十) 「忠実」(第三期、巻四-第十一)
- ・「独を慎め」(第二期、巻六-第十五課) 「良心」(第三期、巻六-第十六課)
- ・「師を敬え」(第二期、巻六-第二十一課) 「師弟」(第三期、巻六-第二十三課)

などである。命令・禁止等の文・句的表現が少なくなるとともに、そうした具体的な指示ではなく、ある種抽象的で一般的な道德上の価値をもつと考えられる、二字漢語で題名が構成されるようになる傾向が、高学年を中心に顕著になっていくと主張した。

(3) 漢語の意味変化の類型

二字漢語のうち、二字が対になるもしくは反対の意味を表すもののくみあわせになっているもの(ただし日本語の中での意味変化を問題にできる、つまり日本語史資料において変化や変異を検討することができるもの)について、構成要素どうしの関係と、それと熟語全体の意味との関係を考察することによって、

- A 二字が図と地の関係にあるもの(「緩急」「異同」「動静」等)
- B 二字が融合して意味が抽象化したもの(「存亡」「与奪」「賞罰」等)
- C 一方の意味が他方の意味を含むもの(「出没」等)

といった意味変化の類型があることを、実例の検討をもとに指摘した。

(4) 語史研究の成果による文学作品の本文解釈

上の(3)で言及した「賞罰」の語史的検討によって、「方丈記」の本文解釈を論じた。「方丈記」については以前も論じた(鳴海2016「流れは絶えず」「方丈記」冒頭の文と文章の構造)、『京都府立大学学術報告 人文 68』が、これらは、先行注釈における指摘を議論のよりどころとしつつ、言語研究の側面からの分析によって新解釈を提示することをこころみたものである。

なお関連して、日本語史の研究・調査のマニュアル書において、書誌学・文献学の基本的な点について解説する章を担当した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 鳴海 伸一	4. 巻 1(2)
2. 論文標題 書評 福島直恭 著『訓読と漢語の歴史 [ものがたり]』	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 学会通信 漢字之窗	6. 最初と最後の頁 58
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鳴海 伸一	4. 巻 21
2. 論文標題 方丈記「賞罰はなはだし」の解釈 漢語の意味変化の一類型	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 言語文化研究	6. 最初と最後の頁 19-38
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鳴海 伸一	4. 巻 16(2)
2. 論文標題 語彙 (史的研究)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本語の研究	6. 最初と最後の頁 37-44
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 鳴海 伸一	4. 巻 59
2. 論文標題 トシテ型漢語副詞における表現の固定化 「遅々として」を中心に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国語学研究	6. 最初と最後の頁 552-538
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 鳴海 伸一
2. 発表標題 第一場 日本語史研究の方法 意味変化を中心に 第二場 言語変化論 規範意識とのかかわり
3. 学会等名 学術講演会（東華大学外語学院）（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鳴海 伸一
2. 発表標題 「方丈記」を読んで日本語の歴史を考える
3. 学会等名 京都府立大学京都地域未来創造センター 令和元年度桜楓講座（春の部）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 鳴海 伸一	4. 発行年 2022年
2. 出版社 朝倉書店	5. 総ページ数 136-155 (201)
3. 書名 「第一〇章 国定教科書「修身」の語彙」（飛田良文(編)『シリーズ 日本語の語彙 6 近代の語彙 2 日本語の規範ができる時代 』）	

1. 著者名 鳴海 伸一	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 23-41 (328)
3. 書名 「第2章 古い文献の姿」（大木一夫(編)『ガイドブック日本語史調査法』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------